

news

THE MUSEUM OF MODERN ART, WAKAYAMA

2019 098



村上華岳《聖者の死（大下絵）》1918（大正7） 京都市美術館蔵
「創立100周年記念 国画創作協会の全貌展」より

清姫の「盲目」

村上華岳 《日高河清姫図》 より



図1 村上華岳 《日高河清姫図》
1919 (大正8) 東京国立近代美術館蔵
Photo: MOMAT/DNPartcom

人間が行き場のない思いにさいなまれて、身を滅ぼす悲劇は、古今東西数多く残っている。中でも、和歌山県日高川町の古利道成寺にまつわる安珍清姫伝説は、日本屈指のショッキングな物語ではないだろうか。恋に目がくらんだ清姫は、再会の約束を破った若い僧侶安珍を追って、長い道のりを必死に駆けていく。途中、日高川に行く手を阻まれるも、異形の大蛇となって急流を渡り、最後は道成寺の釣鐘に隠れたその男を焼き殺してしまう。絵画だけでなく、能や歌舞伎など、様々な芸術作品に取り上げられたこの物語は、現代でもよく知られている。

清姫といえ、鬼女や蛇といった姿が思い起こされるだろうか。しかし、彼女を、儚げな一人の女性として描いた画家

がいる。国画創作協会の創立会員のひとり、村上華岳(1888-1939)である。当館で開催した「創立100周年記念 国画創作協会の全貌展」(2018年11月3日-12月16日)では、彼の代表作であり、重要文化財にも指定される《日高河清姫図》(図1以下、《日高河》)を、幸いにも全会期を通して展示し、紹介することができた。

この展覧会は、国画創作協会が開催した展覧会(国展)の出品作を集めたもので、《日高河》も第2回国展の出品作にあたる。展示室で大画面で強い色彩の作品が数多く並ぶ中、《日高河》はそれらに見劣りしない確かな存在感を示していた。

この作品には、当時から多くの人が惹きつけられてきた。かの芥川龍之介も、「村上華岳氏の「日高川」を面白いと思ふ。いかにも清姫が安珍に惚れて追ひかけて来たやうな心持が出てゐると思ふ。」と賞讃し、続けて、「只あれを見たとき、清姫は盲目になったのかと思つた」と、興味深い言葉を残している¹⁾。

目を閉じた清姫の表情は、前方に急流が迫り、背後に絶壁がそびえる状況で、観る者に危うい印象を与える。本作品に関する数々の研究が積み重ねられる中²⁾、目を閉じて描いた理由についても、飯尾由貴子氏が『朝顔日記』の主人公深雪から着想を得た可能性を指摘している³⁾。本稿では、展覧会調査を通じて得られた情報とともに、その理由に迫ってみたい。

《日高河》以前にも、華岳は「盲目」をテーマに作品を描いている。当時の新聞記事から、1918(大正7)年の第1回国展への出品作として、華岳が当初、《梅の木に靠る婦人》、《盲者の春》(図2)の発表を予定していたことがわかった。当時の写真には、その画稿らしきものも確認できる(参考図版)。これらを対作品と見るならば、画題は、女性(梅の精である羅浮仙か)のまとう梅花の香りによって、春の訪れに気づいた盲目の老人、といったところだろうか。

第1回国展で、この作品は未発表に終わり、最終的には釈迦入滅を描いた《聖者の死》(図3)が出品された(今回の『和歌山県立近代美術館 NEWS』No.98 表紙図版はその大下絵)。本作品は、構図などに

当時長法寺にあった《釈迦金棺出現図》(京都国立博物館蔵)の影響がみられる。

金棺出現とは、釈迦の入滅に駆けつけた仏母摩耶夫人に、大神通力で棺の蓋をあけた釈迦が、この世の無常の理を説く仏伝の一場面である。華岳は、国画創作協会の顧問を務めた美学者中井宗太郎によるこの《釈迦金棺出現図》に関する話を聞いて、「死んだ仏陀の復活として金棺より起き上つて摩耶の為に法を説く光景は想



図2 村上華岳 《盲者の春》
『新京都』8-11、1918(大正7)年11月に掲載



参考図版 1917(大正6)年8月
アトリエにて華岳と佳子夫人
背後の左の作品が《梅の木に靠る婦人》、右の作品が《盲者の春》とみられる



図3 村上華岳《聖者の死》1918（大正7）
【関東大震災により焼失】

像してさへ崇敬であるから是非描いてみたいと思ひます」と語ったという^{*4}。

また、中井の「衆生は道と光とを失つた群盲である。この群盲に道と光を與ふるものは聖者である。（略）この唯一の道であり光である聖者が私等を見棄てて他界に赴く時、再び盲目にかへつた私等の悲みは如何であらう」^{*5}という解説に、おそらく華岳は感化を受けて、「盲目」を強く意識したと考えられる。

俗人は目が見えないのに対して、彼らを導く聖人は目を開いている、という中井が説いた世界観は、華岳の多くの作品に通底しており、例えば、華岳がこの時期に手がけた愛らしい舞妓図も、俗人として描いたためか、甘美な夢の中に漂うかのように、殆ど目が閉じた表情で描かれている。

また、金棺出現は、釈迦と摩耶夫人の壮大な母子の物語でもあり、《聖者の死》の衆生の中にも、摩耶夫人と思いき女性の後姿が見える。そして、1919（大正8）年の第2回国展出品に向けて、華岳は母子像に取り組み、当初《母と子》（図4）という作品を準備していた。当時の雑誌『中央美術』と『制作』に掲載された画稿の写真（図5）では、どちらも薄く目を開けた母が、我が子へ慈愛のまなざしを向けている。よく見比べると、それぞれの母親の表情は異なり、修正が加えられた顔の部分には、試行錯誤の跡が生々しい。

しかし、《母と子》は完成を見ず、結局《日高河》が発表されることになる。華岳は、なぜ開眼した慈母ではなく、目を閉じた女性を発表したのだろうか。

ここで上蘭四郎氏は「自然な姿の母子像を素直に発表したい華岳の母性に対する葛藤」を指摘し、「母性へのコンプレックスを払拭できない華岳自身の「宿根」を清姫図に仮託して表現したのではなかろうか」としている^{*6}。「母」を描くのが、華岳にとって容易なことではなかったことは、その複雑な生い立ちから推察される。華岳の長女・中川衣子氏によると、華岳の実母は、その夫を亡くした後、7、



図4 村上華岳《母と子（画稿）》『中央美術』5-12、1919（大正8）年12月に掲載



図5 村上華岳《母と子（画稿）》
左：『中央美術』5-12、1919（大正8）年12月に掲載 右：『制作』臨時号・国画創作協会号、1919（大正8）年11月に掲載

8歳の華岳を養子に出し、求婚された男性のもとへ嫁いだという^{*7}。慈愛に満ちた母の姿を描くのは、幼くして母と離ればなれになり、その愛を受けずに育った彼にとって、悩ましい作業であっただろう。中谷伸生氏も、華岳が母子像を描くことは、当時ロダンに心酔して「人間の内の真実」を描こうとしていた彼にとって、「自己の心情と掛け離れたものであったといえるに違いない」と言及している^{*8}。

おそらく華岳は制作の転換を図り、母のまなざしが自らに向けられなかった事実と対峙しなければならなかった。男のもとへ駆けていった遠き日の母を、華岳は悲しい性に翻弄される清姫に重ねて見たのではないだろうか。

今回、展覧会担当者として作品と間近に接した際、淡墨の繊細な線で表された、少女の伸ばすいじらしい手を見ると、その切ない姿は、愛する母に置いていかれた幼い華岳の心情をも物語っているように思えてならなかった。また、《日高河》には、アルミ泥と見られる絵具が使われている。光の当たる角度によって、濁流の川、雨を降らせる空、逆巻く黒髪が、たちまち輝き出す。浅葱色の着物も、光らせると泡沫のような模様が浮かび上がり、道成寺伝説の結末だけでなく、泡と消えた人魚姫も想起されて、その儚さがますます心に迫る。そして、閉じた目に



図6 村上華岳《裸婦図（大下絵）》1920（大正9）京都市立芸術大学芸術資料館蔵

も、涙を溜めているかのように、わずかに光の粒が見えた。

中井の言葉を借りれば、清姫は「道と光とを失つた群盲」のひとりである。華岳は、彼女だけでなく、母や自分を含めた、業の深い「群盲」の存在を、いわば供養するような思いで、清姫の姿に輝きを与えたのかもしれない。彼は、苦闘の末に《日高河》を生み出し、複雑な心境を痛々しいまでに吐露して、鬱屈した感情を昇華させたのだろう。

1920（大正9）年の第3回国展で、華岳は、仏のような慈悲深さをたたえ、開眼した女性像を描いた《裸婦図》（図6 ※図版は大下絵）をついに発表した。華岳が「久遠（＝永遠）の女性」と呼んだ理想の女性像であるこの名作も、それまでの葛藤なくして生まれ得なかったにちがいない。

（藤本真名美）

*1 芥川龍之介「〈日高河〉〈赤松〉など」『中央美術』5-12、1919（大正8）年12月。

*2 中谷伸生「大正八年における村上華岳」『三重県立美術館研究論集』創刊号、1983（昭和58）年／重松知美「村上華岳筆《日高河清姫図》再考—インド細密画との関連から」『デアアルテ』19、2003（平成15）年／飯尾由貴子「村上華岳《日高河清姫図》について」『兵庫県立美術館研究紀要』11、2017（平成29）年など。

*3 前掲注2、飯尾氏論文。

*4 中井宗太郎「〈村上華岳論〉華岳君と論理」『中央美術』5-12、1919（大正8）年12月。

*5 中井宗太郎「金棺出現と色彩象徴」『中外美術』3-2、1918（大正7）年2月。本文では、モーリス・メーテルリンクの戯曲「群盲（盲人たち）」にも触れながら、金棺出現について解説している。

*6 上蘭四郎「華岳が求めた世界」『霊と艶をもとめて 村上華岳展』図録 笠岡市立竹喬美術館、2014（平成26）年。

*7 中川衣子オール・ヒストリー 飯尾由貴子、中川直人、池上裕子によるインタビュー、2009（平成21）年3月27日、日本美術オール・ヒストリー・アーカイブ（URL: www.oralhistory.org）より。

*8 前掲注2、中谷氏論文。

ワークショップ「晩花のふるさとを訪ねて」



題材を探し散策



布ごしに風景を写す



黒田先生に調色方法を習う



着色の様子



黒田先生の講評



完成した作品

「創立100周年記念 国画創作協会の全貌展」の開催に合わせ、NPO 和歌山芸術文化支援協会が主催する体験アート・ワークショップ「晩花のふるさとを訪ねて」が開催されました。当館も企画から実施まで協力して事業を進めて参りましたので、ここにご報告したいと思います。

今回は「国画創作協会の全貌展」に関連したワークショップということで、開催場所や内容は、会の創立メンバーである田辺市中辺路町出身の日本画家、野長瀬晩花^{のながせ ほんか}にちなんだものとなりました。具体的にはその出身地を訪ねて画題を探し、日本画の画材によって描画を試みるというものです。講師を引き受けていただいた日本画家の黒田真里^{くろだ まり}さんも晩花とつながりがあります。その祖父は洋画家の黒田重太郎^{じゅうたろう}で、晩花が1921(大正10)年に土田麦穂^{つちだばくせん}、小野竹喬^{おのちつきょう}と渡欧した際に同行、各地を案内しています。

当日は早朝に当館前に集合、中辺路町までのバス内では藤本真名美学芸員が晩花についてのレクチャーを行いました。到着後、現地集合の参加者も加わって町内の散策を開始。幅広い年代の参加者は、すばらしい秋晴れの空の下、熊野古道沿いの近露王子や今も残る晩花の生家を訪ねたり、日置川にかかる橋の上から晩花も絵にした山並みを眺めたりしながら、自らが描く題材を探しました。

作業場所に移動後、制作の手がかりとするため、黒田さんからご自身の作品や活動の紹介をいただき、藤本学芸員がスライドを交えて晩花の作品や活動を紹介しました。昼食を挟んで本格的に作業開始となり、参加者は絹の質感に似た布を貼った正方形の木枠と描画用の木炭を持って再び外に出ました。

各々目星をつけていた場所に移動し、まずは木炭を使って下絵を描いていきます。慣れない画材にとまどう方もいましたが、布をすかして形を見る方法など、黒田さんの指導もあって、それぞれが風景や道ばたの植物などを写しとっていききました。

作業場所に戻ると最終工程として色づけを行います。日本画の画材や色の作り方については黒田さんからの説明を受け、用意された赤、青、黄と墨(黒)、白の絵具を、原色のまま、あるいは調色して好みの色を作った上で、風景や植物などに着色していきます。これまで使ったことのない絵具のため、その伸び具合や混色の配合などは難しかったようですが、黒田さんやスタッフの補助もあって、すぐに慣れた参加者は、短い時間の中でも自分なりの表現を模索しながら、それぞれの作品を仕上げていきました。

完成後は現在レストランとして営業している晩花の生家の裏庭をお借りし、作品の展示を行いました。晩花の故郷と制作に思いを馳せることのできた有意義なワークショップとなりました。(宮本久宣)

体験アート・ワークショップ

「晩花のふるさとを訪ねて」

実施日：2018(平成30)年11月24日(土)

実施場所：田辺市中辺路町近露周辺

講師：黒田真里(日本画家)

主催：特定非営利活動法人
和歌山芸術文化支援協会(wacss)

後援：和歌山県教育委員会

ニューズ和歌山株式会社

協力：田辺市立美術館

田辺市立美術館分館 熊野古道なかへち美術館

ちかの平安の郷推進協議会

洋食レストラン小鳥の樹

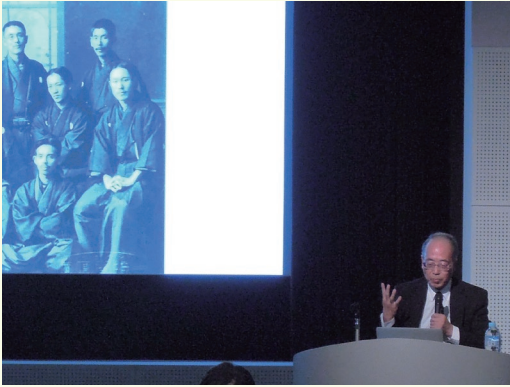
有限会社画箋堂

和歌山県立近代美術館

助成：平成30年度

和歌山県文化振興事業補助事業

「創立 100 周年記念 国画創作協会の全貌展」 記念講演会



笠岡市立竹喬美術館館長 上園四郎氏



大阪大学文学研究科教授 橋爪節也氏

- ・11月4日(日)
上園四郎(笠岡市立竹喬美術館館長)
「近代絵画史における国画創作協会の意義」
- ・12月8日(土)
橋爪節也(大阪大学文学研究科教授)
「大阪の「茶話会」と大正期の日本画壇—国画創作協会と連動したか—」

昨秋、当館で開催した特別展「創立 100 周年記念 国画創作協会の全貌展」では、2人の講師をお招きして、記念講演会を実施いたしました。

はじめに、展覧会がオープンしてまもなく、今回の展覧会の監修者でもある笠岡市立竹喬美術館館長の上園四郎氏に、「近代絵画史における国画創作協会の意義」と題してお話いただきました。上園氏は、1983(昭和58)年の笠岡市立竹喬美術館開館から、笠岡出身の日本画家小野竹喬と、竹喬が創立に参加した国画創作協会の顕彰を継続して来た、国画創作協会研究第一人者のひとりです。特に今回は、1918(大正7)年の国画創作協会創立前後における動きを中心にして、当時国画創作協会が美術界に与えたインパクトをお示しいただきました。

土田麦僊の美術団体立ち上げの構想、横山大観から竹喬や榊原紫峰らへ持ちかけられた再興まもない日本美術院への勧誘、国画創作協会創立前年の文展落選をめぐる画家たちの発奮といった国画創作協会創立前の状況から、国画創作協会創立後では、同会顧問であった竹内栖鳳の舞台裏での動き、国画創作協会の登場による帝国美術院展覧会(帝展)入選作品の傾向の変化、一種の懐柔策としての麦僊の帝展無鑑査への招待など、数々の詳しいエピソードによって、当時の国画創作協会の人々をとりまく京都画壇の動向や、画家たちの人間模様を鮮やかに浮かび上がらせていただきました。

このほか、吹田草牧の手記を紐解いて、今回はじめて明らかになった国画創作協

会の秘話も紹介。第1回国画創作協会展出品の麦僊《湯女》には、一部村上華岳の手が入っており、その力添えによって完成を見たという、草牧が書き残した驚きの事実については、今回の展覧会図録でも詳しく紹介されています*。上園氏は、長年にわたる研究の蓄積や、最新の研究成果も反映させつつ、その時代を実際に見て来られたかのように次々に語ってくださり、今回のご講演は、創立100年の節目に国画創作協会を改めて近代絵画史上に位置づける試みとなりました。

さて、国画創作協会といえば、京都の美術団体と思われる方も多いかと思いますが、大阪画壇とも密接な関係がありますが、たとえば、国展出品者の中には、山口草平など大阪を中心に活動した画家がおり、一方、大正期に大阪で開催された大阪美術展覧会(大展)にも、草平のほか西村更華や猪原大華など、国展の出品画家の名が散見されます。また、草平や北野恒富など大阪の青年画家たちによる日本画団体「茶話会」が、国画創作協会とほぼ同時期に結成されているのも注目されます。そこで、展覧会会期の後半には、2017(平成29)年あべのハルカス美術館「北野恒富展」の監修をはじめとする、近代大阪画壇の研究で知られる大阪大学文学研究科教授の橋爪節也氏をお招きして、講演会「大阪の『茶話会』と大正期の日本画壇—国画創作協会と連動したか—」を開催しました。

橋爪氏は、1903(明治36)年第五回内国勧業博覧会における大阪の日本画界の盛り上がり、明治期の大阪絵画春秋会など

美術団体の勃興、大正期に入ってからの大正美術会や土筆会の登場と大展の開催など、近代大阪の日本画界の動きについて詳しく紹介。江戸・明治から遡って大阪画壇の展開を辿った上で、「茶話会」をはじめとする国画創作協会と同時代の近代大阪画壇について検証されます。橋爪氏は、国画創作協会と「茶話会」を比較して、おそらく当時はそれぞれが同じ意識を持って創作活動を行っていたものの、前者には「画家を結びつける芯」として、創立会員がいずれも京都市立絵画専門学校に学んだという共通項が存在したのに対し、後者にはそれが見出しにくい点に着目されます。そして、そのことが、短命ながら10年存続した国画創作協会と、1回の展覧会を開催して自然消滅した「茶話会」の命運を分けたのではないかと指摘されました。情報盛りだくさんのスライドや配付資料によって、専門的な内容について詳細に説明される一方、軽快なトークで聴衆を楽しませ、会場からは時折笑い声も聞こえました。

今回の講演会は、展覧会会場に並ぶ作品から縦横に広がる美術の世界を知ってもらうことを一つの目的として企画しました。国画創作協会研究の進展はもちろん、同時代の日本画に関しても、皆さんの関心を広げるきっかけになったなら幸いです。(藤本真名美)

* 上園四郎「国画創作協会の理想と現実、虚と実」『創立100周年記念 国画創作協会の全貌展』図録 笠岡市立竹喬美術館、和歌山県立近代美術館、新潟県立万代島美術館、2018年9月

《きずな》について私が知っている二、三の事柄

東京大学中央食堂に展示されていた宇佐美圭司作品について

昨年、美術界を騒がせた話題の中でも、東京大学生協が、中央食堂に長年飾られていた宇佐美圭司の作品《きずな》(1977)を改装にともない廃棄処分したことは、尋常ならざる事件であった。

宇佐美圭司(1940-2012)は吹田市に生まれ、長く東京を活動の拠点としてきた作家であったが、母方が和歌山県の出身という縁があって、当館でも作品を収集し、しばしば展覧会での紹介を行ってきた。2001(平成13)年には大規模な回顧展を開催し、またその没後の2016(平成28)年には、関西では初となる回顧展を開催している。それらの展覧会を担当した縁で、さほど多くはないネット上の情報にも目を配っていた筆者が、2018(平成30)年3月15日付の東京大学生協による組合員への回答「ひとことカード集」¹⁾に「処分させていただくことといたしました」という一文を見出したのは4月26日のことだった。現在、この回答は誤った認識によるものだったとして削除されたままとされているが、いきなり目に飛び込んできた「処分」の文字には動転した。回答からでも既に一月以上が経過している。一体どのような「処分」が行われたというのか、気が重い確認しないわけに

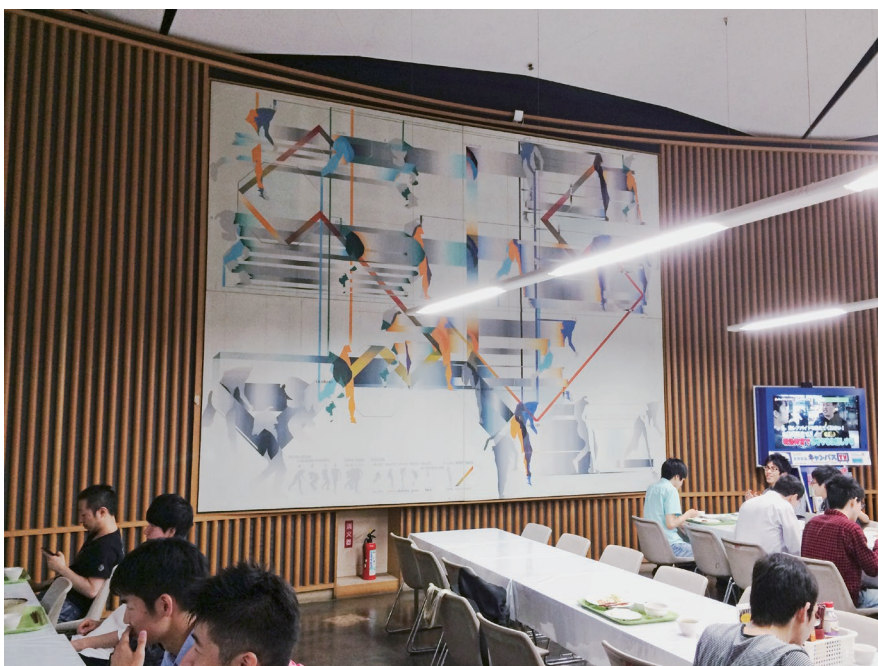
はいかず、東大の生協に直接電話をかけた。電話に出た担当者は大変慎重で、処分の内容を明言されなかったのだが、譲渡や売却をしたのではなく、この世界内に物理的に存在しない状態になっているのかという問いかけを肯定され、廃棄処分を行ったという表現を否定できないという回答だった。

あまりのことにすぐさま自分の Facebook ページに書き込んだのが、たまたま岡崎乾二郎氏の目にとまったことから広く知られる事態となり²⁾、早くも翌日には報道で取り上げられるところとなった。東京大学の対応も迅速で、5月8日には東京大学消費生活協同組合理事長の武川正吾氏より「東京大学中央食堂の絵画廃棄処分についてのお詫び」、代表理事・専務理事の増田和也氏より「東京大学中央食堂の絵画廃棄処分についてのお詫びと経緯のご報告」³⁾、東京大学理事・副学長の石井洋二郎氏(奨学厚生担当)と小関敏彦氏(施設担当)の連名で「東京大学中央食堂の絵画廃棄処分について[その他]」(本部広報課)が発表されている⁴⁾。東京大学は、さらに調査を踏まえて9月28日にシンポジウム「宇佐美圭司《きずな》から出発して」を開催するにいたり、事態

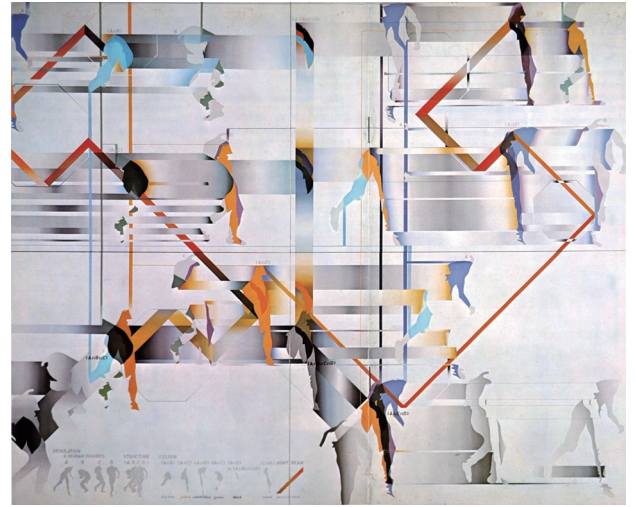
を重く見ていたことは理解される⁵⁾。

ところで、廃棄された作品についての詳細は当初よくわからず、題名すらはっきりしない状態だった。宇佐美氏が存命中に行った展覧会の準備では「東大の壁画」と説明され、設置場所の状況と作品の大きさから輸送して出品することは無理であると早い段階で判断されたため、作品写真の撮影はもとより、それ以上の調査を行っていなかったのである。筆者も実は作品そのものを実見する機会を得ないままであった。1992(平成4)年に開催された「宇佐美圭司回顧展：世界の構成を語り直そう」の図録には、この作品に触れた文章がいくつか掲載されており、まずはそこからこの作品について再確認された。制作の経緯を記されているのが高階秀爾氏で、学生食堂の壁に飾る絵について相談され、芸術作品として優れ、現代的であり、感性と知性に等しく訴えかける作品をと考えて宇佐美圭司を推薦したのだという⁶⁾。また当の作品に《きずな》という題名があったことが、実際に食堂を訪問した黒井千次氏の文章に記されている⁷⁾。そして、当の宇佐美氏本人による年譜の中には、2m角のキャンバス4枚を組み合わせた4m×4mの作品として構想されたものだが、壁に合わせて曲面にできなかったことが心残りだと記されている⁸⁾。後年、筆者も同様の言葉を宇佐美氏からうかがったことがある。巨大な作品であるため自宅のアトリエでは全体を制作できず、当時出光倉庫にあったサム・フランシスのアトリエを借りて描いたと記されているが、御坊市出身の画家、野田裕示氏もその頃サムのアトリエに寄寓しており、制作する宇佐美氏の姿を目にしていたという。だから、「壁画」と呼ばれていたものの、《きずな》は壁に直接描かれていたのではなく、壁を覆うほどの巨大なキャンバスの作品であったわけである。

安田講堂の地下に中央食堂が竣工したのは1976(昭和51)年だが、これは東京大学創立百年記念事業の一貫だったようで、作品制作を依頼したのもてっきり東京大学であると考えていた。しかし新たに東大生協の資料が残されていることが



東京大学中央食堂に飾られていた《きずな》加治屋健司氏提供 2016(平成28)年6月30日撮影



《水族館の中の水族館 No. 2》1967（昭和42）年
油彩・キャンバス、185.2×276.0cm
和歌山県立近代美術館蔵

《きずな》1977（昭和52）年、大学生協東京事業連合「事業案内」表紙から表紙に掲載された画像のため作品の端がトリミングされているが、全体をとらえた正面からの写真はこれ以外に発見されていない

わかり⁹、《きずな》は生協創立30周年を記念して東大生協元役員・従業員、現役役員・従業員より寄付されたものであったことが判明した¹⁰。だから作品の所蔵者も東京大学生協だったわけである。

当初《きずな》は、つるんとした壁面の上に吊られていたのだが、1994（平成6）年に行われた改装により、細い木の棧が縦に壁面を覆う意匠の中に埋め込まれて、壁面との一体感が格段に増すことになった。この時に額を新調するための書類が宇佐美氏の元から新たに発見され、作品の大きさは4m×4mではなく、184.5cm×239.7cmのキャンバス4枚を組み合わせた369.0cm×479.4cmであることがわかった。この時に額縁を作り、設置も行った額縁店によれば、厚さ1cmの額縁をつけて、壁面にちょうど収まるよう開口が設けられており、すっぽりとはめ込んでビスで打つだけで簡単に設置できたそうである。それから23年。中央食堂は2017（平成29）年、東京大学創立140周年記念事業の一環として全面リニューアルされることとなり、8月4日から翌2018（平成30）年3月末まで休業。工事の監修者は新たな設置場所を確認していたというのが¹¹、工事の過程で《きずな》は、取り外すことができず、建物から外に出せないと判断され、9月14日、破壊されることになったというのである。

さて、《きずな》に描かれているのは、走りくる、立ち止まる、投げる、うずくまるという4つの動作を行う頭部のない人型の組み合わせである。ロサンゼルス、ワッツ地区でのアフリカ系アメリカ人によ

る暴動を伝える1965（昭和40）年の『LIFE』誌の写真¹²から抜き出された6つの人型が、翌年から作品の主題となり、数年にわたって展開する中で4つに整理されていく。当館所蔵の《水族館の中の水族館 No. 2》（1967）はその初期の代表作である。人型の重なる部分が相互に関連し、グラデーションの帯で結ばれて変換されて連なっていく1971（昭和46）年の《Ghostplan》シリーズで人型による制作は一旦終結し、1972（昭和47）年からは6つの横顔のシルエットを六角形に組み合わせたシリーズが試みられている。それが1977（昭和52）年、《きずな》において再度姿を表し、翌年からの《100枚のドローイング》シリーズを経て、生涯に渡る主題として試みられるのである。1971年に一旦制作が終了された段階での《Ghostplan 2》は現在タイムラー・アート・コレクションの所蔵としてシュトゥットガルトにあり、国内で見ることのできる同スタイルの作品としても《きずな》は重要なものであった¹³。記号化された人体の形を画面上で操作することによって、世界の構成を語り直し、絵画によって宇宙の有り様を把握しようと試みる姿勢は、ルネサンス以来の科学としての芸術への取り組みに他ならない。東京大学生協中央食堂を飾る絵画を依頼された宇佐美氏にとっては、サンタ・マリア・デル・グラツィエ教会の食堂を飾ったレオナルドの《最後の晩餐》に匹敵する仕事と信じられたことであろう。あるいは哲人たちを星座のように配することで、古代以来の知のあり方と関連を示したラファエロの《アテネの学堂》も想起

されたことであろう。

既に作品が失われてしまったという事実は取り返しがつかないのだが、廃棄に至る経緯には依然として理解に苦しむところもあり、より詳細な報告が待たれる一方、作品についての知見をできるだけ発掘し、宇佐美圭司という作家の業績を跡づけることには、今後も取り組んでいきたいと考えている。（奥村泰彦）

*1 <http://www.utcoop.or.jp/hitokoto/archives/35540?fbclid=IwAR3zQ44C7PZm-SflvxoCctJAVBMUnqtIMC8OCKhtKs0Fug4cpka7m2kNC-s>

*2 筆者自身のFacebookへの書き込みと関連する記事などを以下に仮にまとめている。<https://www.facebook.com/yasuhiko.okumura.5/posts/1948530125237784>

*3 http://www.utcoop.or.jp/news/news_detail_4946.html

*4 https://www.u-tokyo.ac.jp/focus/ja/articles/n_z1602_00002.html

*5 https://www.u-tokyo.ac.jp/focus/ja/events/z0801_00004.html

*6 高階秀爾「感性と知性に訴える絵を……」『宇佐美圭司回顧展：世界の構成を語り直そう【図録】』、財団法人セゾン現代美術館、1992年、p.111。

*7 黒井千次「拒絶のキャンパス」前掲展図録、p.113。

*8 宇佐美圭司「回想ノート」前掲展図録、p.162。

*9 加治屋健司 東京大学大学院総合文化研究科准教授の調査による。

*10 東京大学消費生活協同組合 東大生協史料室『東大生協史通信』第1号、発行同所、1995年、p.57。

*11 前掲註3参照：増田和也（東京大学消費生活協同組合代表理事・専務理事）「東京大学中央食堂の絵画廃棄処分についてのお詫びと経緯のご報告」。

*12 LIFE, vol. 59, No. 9, Time inc., August 27, 1965, pp.24-25.

*13 《Ghostplan 2》1971, 240cm×370cm, <http://art.daimler.com/en/artwork/ghostplan-2-keiji-usami-1971-2/>

「保存」の話をしよう。

⑧ 大工事！

美術館や博物館へよく行かれる方は、最近、長期休館の館が多いことにお気づきかと思います。多くの館が、空調や照明などを修理、あるいは交換しなければいけない時期に入っているからです。

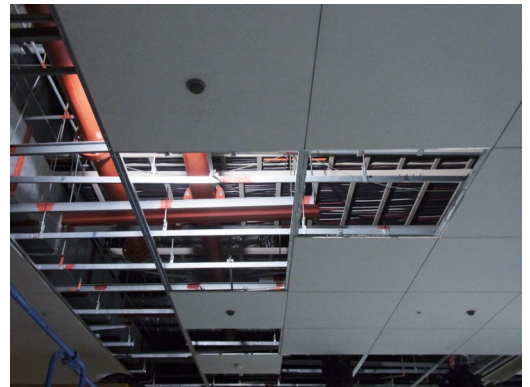
当館も、この1月から休館に入りました。開館からほぼ30年、さまざまな部分が傷んできており、なかでも急いで対策をとらなければならないのが、古くなった空調機です。いままで、修理や調整で保たせてきましたが、美術館が建てられたときから、休むことなく働き続けている2台の大きな機械を、新しくしなければなりません。

空調機の工事といっても、私たちの自宅にあるようなエアコンを買って替えるのとは違い、大仕事です。まず、新しい機械のための配管を設計して製作し、壁の中、天井の上でつないでいきます。その設計そのものが、新しい建物のためにするときとは違い、もとの配管や配線、ダクトを避けながら考えなければならず、大掛かりなパズルのような作業です。

そうした準備を経て新しい機械が作られ、ようやく1月から入れ替えが始まりました。美術館は休館したとしても、中に作品があることは変わりませんので、作品を保管している収蔵庫や展示室のための空調は続けながら、2台ある空調機の片方ずつ機械を



巨大なクレーンで新しい空調機を入れています



天井板を外して新しい配管をつないでいます

替えています。

これらの部品は大きくて重いものですから、クレーンなどの重機も使わなければならないのですが、重い機械や部品で敷地の敷石が割れてしまうのを防ぐために、屋外駐車場には鉄板を敷き詰めています。しかしこの鉄板も1枚960kgあり、それを運ぶにもクレーンが必要です。

当館の近くには、一般の住宅以外にも幼稚園、小学校、中学校があります。とくに毎朝、駐車場の周りは、お子さんを幼稚園に送るご家族の車で賑やかになります。そういった人の出入りに危険がないよう、場所を区切って工事を進めています。どなたにも事故がないように、作業員のみなさんはもちろん気をつけていらっしゃいますし、必

要なときには警備員も立ちます。

しかしこのコーナーでもみなさまへ、駐車場のあたりを通るときには、ご自身でも注意していただきますようお願いしたいと思います。工事の場合、危険な場所には、展示室の目立たない「結界」とはちがって、立入禁止の派手なラインが、赤い三角形のコーンとバーではっきりと示されています。

しばらくの間、観覧会をご覧いただけないのは寂しいですが、工事が終わったら、より良い空気でご覧いただけるはずですよ。楽しみにしててください。私個人は、安定した運転が期待できる空調機械が入ることのほかに、いま現場で巨大な重機が働く様子を見られるのを楽しんでいます。

(植野比佐見)

Museum Calendar

開館／9時30分～17時00分（入場は16時30分まで）
休館／毎週月曜日（祝休日の場合は開館、翌平日休館）

4.27(土)～6.30(日)

LOVE (your) LIFE ! まいにちがアート

私たちの日常とちよっとズレているアートの世界。けれど作品を作る人も、私たちと同じように日々の生活を送っています。身近な生活を接点にして、作る人と見る人の視点をつなぎ、アートを楽しむ力を生かす力として位置づけます。



野田哲也《日記 1976年2月15日》1976

4.27(土)～5.19(日) コレクション展 2019-春 + 新収蔵作品

6.8(土)～9.1(日)

特別展 ニューヨーク・アートシーン ーロスコ、ウォーホルから

草間彌生、バスキアまでー
滋賀県立近代美術館コレクションを中心に
第二次世界大戦後の美術において、ニューヨークは多くの画期的な表現を生み出しました。抽象表現主義からニュー・ペインティングにいたるニューヨークの美術のおよそ半世紀の歴史を追います。



モーリス・ルイス《ダレット・ペー》1959
滋賀県立近代美術館蔵

メールマガジン Facebook twitter ご案内

メールマガジンでは展示会の情報はもちろん、講演会、トーク、ワークショップなど当館に関連するタイムリーなトピックスを定期的にお届けしています。当館ホームページよりご登録いただけます。また Facebook や twitter でも、最新の情報を発信しています。あわせてご利用ください。



友の会 会員特典いろいろ

1. 展示会の無料観覧
2. 各種行事への参加（美術鑑賞ツアー、ミュージアムコンサートなど）
3. 展示会のご案内、美術館ニュース、その他情報の配布
4. 版画の頒布会への参加
5. 当館ミュージアムショップでの割引
6. 館内レストランでの割引

入会のご案内

一般会員 6,000 円
学生会員 3,000 円

ミュージアムショップにてお手続きいただけます。会員証即日発行。郵便振替でもお申し込みいただけます。詳しくは友の会事務局まで。
Tel. 073-436-8690 担当：中川

